抄 録

矯 正 科

乳幼児の下顎角、その特異性と變化

The Mandibular Angle in Infancy: Its Significance and Modification. J. A. D. A. 1941, P. 921.

By Stunz, D. I.

發育期にある小児の下顎角の大きさに就いては從來相當研究された問題であるが乳幼児に關しては、比較的なおさりにされてゐたようである、で一般には初産兒の下顎角は175度内外であると云ふように信ぜられてゐる。

著者はこの問題を生體に就いて研究するために乳幼児の側貌レ線寫眞を撮影しこれより下顎角を測定して極めて興味ある成績を得た。

被檢材料は白人の男女合せて325名の乳幼児で年齢は出生後24時間から24ヶ月にわたるものであつた。

實驗方法

まづ正確なレ線側貌寫眞を撮影しこのレ線像に於いて、上行枝の後縁に沿ふて直線を引き別に下顎下縁に於いて頤部から顎角點に一線を引きこの二線のなす角を下顎角としたのである。尙この方法の他に、ある場合には下顎截痕を垂直線の起始點とし上行枝の中央を通る直線を畫きこれと、さきに述べた水平線とのなす角度を以て下顎角と見做す方法を用ひた。但しこの方法を用ひた時は前述した方法に較べて4度だけ角度が小さかつた。第三の方法は垂直線として上行枝の前縁或は後縁に沿ふ直線を選び水平線は頤部の代りに頤孔の直下で終る線を利用した。この方法では最初に述べた方法に較べて大約2—4度小さかつた。

實驗成績 實驗成績をとりまとめて見ると生後1ヶ月以内では平均141度(43名)、1—2ヶ月では138度、2—3ヶ月では134度と云ふ割合で大體年齢の進むに従つて下顎角の減少して行くことは先人の業績と全く同様である。最後に23—24ヶ月では126度を示してゐた。尙著者はこの研究成績の中、特に興味ある二、三の點に就いて述べてゐる。即ち2歳以下で下顎が著しく後退(遠心位をとつてゐる場合)してゐる時はその下顎角はその年齢の平均角度より8度も小さかつた。しかしこれと反對に切端咬合の場合は8度も大きく、反對咬合の場合は11度も大であつた。

尙不正咬合と顎角との關係を調査したが第一級と第二級)アンゲル分類)は被檢材料が少かつたためにその間大した變化は認められなかつたが第三級に屬するものはその年齢に相當する平均値より12度も大であつた。かう云ふ點から見ても顎角の大きさ咬合状態との間に一定の關係があることは明瞭である。

尙顎角の變化はその機能と重大な關係があるもので、生後1週から10日間位で授乳がはじまるとその角は2—7度位小さくなる。出生直後から24ヶ月迄の間の顎角の變化を見ると最初の5ヶ月間は11度の減少を來してゐるが、その後は次第に減少の度を減じのちの18ヶ月では僅かに4度の減少に過ぎない。これは少くとも顎の機能と重大な關係があると考えるのが妥當であらう。以上の事實から見ても「特に乳を飲む」機能と顎角の變化との間に密接の關係があることは想像するに難くない、従つて人工榮養の場合は一層この點に注意を向けることが肝要であると結び、更に下顎骨の正常な發育竝に變化を知るために初生兒の側貌レ線寫眞撮影の必要性を特に強調したいと結論してゐる。

(高橋新次郎抄)